

平成21年度 逗子市学習状況調査の結果

1. 調査の趣旨

市立小学校及び中学校における日頃の学習の成果や状況を把握し、その結果を教科指導における指導方法工夫・改善及び児童・生徒の学習に役立てるため、平成21年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査と同一の調査を市立小・中学校全校で実施した。

2. 実施内容

(1)実施期日 平成22年1月18日(月)

(2)実施人数及び実施教科

ア 小学校(第5学年在籍児童 480名)

教科:国語・社会・算数・理科

イ 中学校(第2学年在籍生徒 381名)

教科:国語・社会・数学・理科・外国語(英語)

3. 集計の方法について

(1)業者委託により採点・集計を行った。

(2)小問正答率

$$\text{正答率(\%)} = (\text{小問ごとの正解者数}) \div (\text{小問ごとの実施人数}) \times 100$$

(3)大問正答率、観点別正答率

大問、観点で、それぞれ小問正答率の平均を算出した。

小学校【国語】

(1) 調査結果の特色

全体	<p>「関心・意欲・態度」「話す・聞く」「書く」「読む」の4観点の正答率は県の正答率を上回り、「知識・理解・技能」の観点では県とほぼ同様という結果で、学習状況は良好であるといえます。</p> <p>「書く能力」では昨年に引き続き県の正答率を大きく上回ってはいるものの、正答率が64.1%と、昨年の85.3%から大きく下がっていますので、今後の課題となります。</p>	
観点別	関心意欲態度	<p>「書く能力」の観点と重複した問題で、資料から読み取ったことや、自分の考えが筋道立てて伝わるように工夫しようとしているかが問われています。「書く」という観点では準正答となるものも正答とされているにもかかわらず、その値は75.4%です。県平均は上回っているものの、条件に応じた文章を書くことへの意欲や関心をより高める必要があります。</p>
	話す聞く能力	<p>「話す・聞く能力」の正答率は88.6%で、わずかですが、正答率が5観点のうち唯一昨年度を上回りました。ただし、「発言している人の立場や意見の内容をとらえて、話し合いの内容を聞き取る」という問題では正答率が78.4%と低めです。さらに、二人の子が結論は同じことを言っているものの、その理由が違います。最初に発言している子の理由を正解としている子が21.8%もいました。これは、誰が、何を、どんな理由で発言しているかを注意して聞きとれなかったことによるものではないかと考えられます。また、普段の話し合い活動の中で最後まで人の話を聞き、論議を尽くすということが習慣化されることも大切ではないかと思われます。</p>
	書く能力	<p>「グラフからわかったこと」(事実)「それをもとにして考えたこと」(意見)をしっかりと分けて書くこと、すなわち、二つの内容を自分の中でつなげて、条件に応じた文章に書きあげる力を見る問題です。県の正答率を5%以上、上回っているとはいえ、64.1%は「十分満足」という数値ではありません。「事実を分析し、与えられた条件に従って、自分の意見を書く」ということに課題が見られます。</p>
	読む能力	<p>物語を読み、場面の展開にそって、話の内容や登場人物の様子や優れた表現を読み取る力が求められる問題です。登場人物の行動を書かれていることば・文を手がかりにして正しく読み取る問、文中の「それ」(指示語)が指している内容を読み取る問については、97.0%、82.1%と高い正答率を示しています。しかし、「登場人物の関心の対象をとらえる」というねらいの問では、正答率が53.1%と、上記の二つと比較して明らかに低い結果となっています。「登場人物の関係や行動、会話、風景等の表現に注意し、想像を豊かにしながら読み取る」ということへの指導が必要でしょう。</p>

知識 理解 技能	<p>「漢字を読むこと・書くこと」については、5年生までに習った漢字を、正しく読むでは95.0%の正答率が、4年生までに習った漢字を書くことになると80.0%に達しなくなります。特に「借りる」では「貸りる」と誤答した子が12%もいました。</p> <p>文の構成については、全ての問で100%に近い正答率でした。言葉のつながりを理解することについては良好です。</p> <p>「正しい筆順の理解」を問う問題は2問ありましたが、「有」の正答率は40%にも届きませんでした。今後の指導に大きな課題を残しました。</p>
----------------	---

(2) 指導上の改善点

「話すこと・聞くこと」

【話す・聞く能力】の育成に当たっては国語の授業の時だけではなく、様々な学習場面や実際の生活場面においてもメモを取りながら聞くことはもちろん、メモを基にして話の組み立てをし、それを基に「伝える」という意識を持つことを指導したいです。したがって、年間指導計画に意図的、計画的に位置づけ、確実に指導する必要があります。

話し合い活動に関しては、今回のテスト結果から「誰が、何を、どんな理由で発言しているか」に注意して聞き取ることが充分ではない子がやや多いことが分かりました。「計画的に話し合おうとする態度を育てる」ためには、まず司会者に話し合いの進め方、発言に対する対応の仕方を十分に指導するとともに、全員が司会を経験できるようにする等、話し合いにおけるそれぞれの役割を各自が理解し、実践できるように指導する必要があります。

なお、話し合うことよさや可能性、効果等を感じて、進んで話し合おうとする態度を育成するために、【話す・聞く能力】を具体化し、この学習活動でどのような力を身につけるのかということを明確に示していくことが大切です。

「書くこと」

【書く能力】の育成にあたっては、まず、実際に文章を書く活動をなるべく多くすることが求められます。その際、何のために(目的・意図)、どんなことを(主題)、どのように(文章全体の構成)書くのかという意識を明確にもたせるようにし、文章表現の基礎的能力が確実につくよう指導を工夫する必要があります。

また、書こうとする態度を育てることも重要です。「書きたい」という意欲がわくような題材の設定や書き出しや構成に対する助言を工夫することで、書くことへの抵抗感を軽減する指導も大事なことです。また、国語科以外の教科でも書く活動を増やし、「書くこと」の習慣化を図ることも大切です。

さらに、書いたものを発表して他者(読み手)と交流する場を設けるなど、自己評価や相互評価を意図的に位置づけることも必要です。

「読むこと」

【読む能力】の育成にあたっては、目的や意図に応じて的確に読み取る能力が一層高まるように指導を工夫する必要があります。

文学的文章を用いた「読み」の指導に当たっては、登場人物の相互関係や心情、場面について

の描写、優れた叙述に注意しながら読み進め、想像を豊かにしながら読み取る工夫が必要です。そのためには、内容をとらえることのみならず、自分の立場だけでなく、様々な立場から書かれている内容についてどのように考えるか、常に意識しながら読むことで、主体的、客観的な読みを育むことができます。その際、読みを深めるために、話し合いなどを通してお互いに考えを交流する場を設定したり、複数の文章を読み比べたりする等の学習活動を工夫することが有効になります。

「言語事項」

漢字については、今年度の「漢字を書くこと」と「漢字を読むこと」の正答率には20ポイント以上の開きがあります。このことから、「漢字を書くこと」について、その一字一字の持つ意味を理解させ、「漢字を読むこと」と同様に文脈の中での意味を考え、使えるように指導する必要があることがわかります。そのためには、反復練習だけでなく、履修した漢字を使って書く場面を意図的に設定する等、丁寧に繰り返し指導することが必要です。さらに、書写との関連を図り、文字の組み立て方を理解しながら筆順を大切にすることが文字を整えて書くことにつながることを、実感的に理解させるよう指導を工夫することが大事です。また、意味の分からない言葉や、読み方の分からない言葉があったら、すぐに辞書を引いて調べることを習慣付けていくことも大切です。そのためには、授業中すぐに辞書が使えるように用意されているという環境作りも重要になってきます。

全体として

国語科で培う能力は、全ての教科の基礎です。国語科でつける力を明確にし、具体化して着実にその力を育成するような授業の工夫・改善を図る必要があります。

「文章や資料等を読み(聞き)、考えて、書く(話す)」という学習活動を、国語科をはじめ全ての教科で行う必要があります。国語科でつけた力が、他の教科等でも生かされることで、国語の力がさらに高まると考えます。

そのためには、児童一人ひとりが自分の考えを持ち、全員が表現できる場面(対話・討論のある授業作り)を意図的に設定することが大切になってきます。

また、学校図書館を活用して優れた文章にふれる機会を増やすことや、国語科として育成する言語活動を明確にし、言語活動の充実を図りながら、着実にその力を育成することを図っていくことが大切です。

小学校【社会】

(1)調査結果の特色

全 体	<p>21年度の観点別の正答率は、4観点とも県の観点別正答率を上回っていますが、20年度と比べ、「観察・資料活用の技能・表現」を除き低下しました。特に「社会的事象への関心・意欲・態度」については、20年度96%から72.8%と大きくダウンしています。</p> <p>原因として考えられるのは、20年度はこの観点での回答方法が記述式、または選択式だったのが、21年度は、大半が論述式となったことが挙げられます。各小問ごとの正答率では、問二については、特に良好な結果となりました。</p> <p>今回の調査においても、「日本の農業や水産業」「日本の工業」「日本の国土の自然」について問題がバランスよく取り入れられています。特に、問七の「森林の働きについての理解」の問題では今日的なテーマについて言及したもので、子どもたちの関心も高く、論述式の回答の中では最も正答率は高くなりました。日常からテレビや新聞等といったメディアから得た知識を活用し解答しようとする姿勢が見られています。しかし、21年度も問四のような、複数の資料から答えを導き出す問題では正答率が低く、引き続き重点課題として取り組んでいく必要があるでしょう。</p>
観 点	<p>関心 意欲 態度</p> <p>今回は、論述式で解答するものが多く、結果として正答率は20年度より大幅に下がりました。しかし、今日的な課題に興味・関心をもっている児童は多く、頭では理解できていても、それを文章として表現するのが苦手なようです。今後はいっそう、自分の考えをまとめていく力の育成が必要でしょう。児童には、常に新しい情報に目を向け、身近な課題だけでなく日本や世界で起こっている諸問題についても関心をもたせるような取り組みの工夫が大切です。</p>
点	<p>思考 判断</p> <p>論述式の解答だったためか20年度より正答率は下がっています。ただ、自動車工場の特色や社会のニーズに応えた自動車の特徴などは、社会見学の実験が活かされており良くできていました。与えられた資料を読み取り、それが何を表しているのか考察する力、さらに自分の考えをまとめていく力を今後も育てていく必要があります。</p>
別	<p>技能 表現</p> <p>グラフや資料を読み取る問題の正答率は、約80%と20年度を上回りました。しかし、問四の(2)のように複数の異なる資料を関連させて考える問題は、苦手なようです。引き続き、授業の中で出来るだけ多く資料集や新聞などを活用する機会を設け、異なる資料の関連性やその見方について取り扱うとともに、それらを活用して、調べ、考え、まとめる活動を充実するなど指導の工夫改善が必要です。</p>

知識 理解	知識・理解を問う調査は、4つの観点の中では、最も高い正答率でした。児童の興味・関心との関わりもありますが、指導者が常に時事に関する最新の話題を取り上げ、児童がモチベーションをもち続けられるよう教材研究や指導方法の工夫を続けていく不断の努力が大切です。
----------	---

(2)指導上の改善点

【関心・意欲・態度】について

社会情勢の変化に伴い、社会科で学ぶよう求められる内容はここ数年で多様化しています。そのため、指導者は、教科書で学ぶ内容だけでなく、地域や身近な生活の中から社会的な思考や判断を養うための「素材」を発掘し、「教材」として活用していくコーディネート力が必要でしょう。また、新聞やテレビのニュース等で話題になっていること、児童が身の回りで見つけたものや体験した出来事なども積極的に取り上げることで、児童が自ら課題を見つけ、解決する資質を育てるような指導の工夫も大切です。

【社会的な思考・判断】について

児童が課題を自分の問題として捉え、また課題に対し、自分なりの考えをもったり、友だちの考えを聞いたりする中から、よりよく解決しようとする手段を見出せるよう支援していく必要があるでしょう。また、自分の考えや友だちの考えと自分の考えとの対比を文章にまとめたり、発表したりする活動を多く取り入れ、社会科における「読解力」育成に努めることも大切です。

【資料活用の技能・表現】について

資料活用の技能に必要なことは、正しい見方・読み取り方を指導したり、複数の異なる資料を対比させ、適切に読み取る力を育成したりするだけでなく、話し合い等を通して資料から読み取れることを、自分と友だちの意見とを対比させながら様々な視点から、ものの見方・考え方を学ぶことも大切です。

そのためには、児童の発達段階に応じた適切な資料を準備し、それを活用した活動をできるだけ多く行うことで、児童の資料に対する抵抗感を和らげ、複数の資料から共通点・相違点を見出す練習に繋げていく指導が必要です。

【知識・理解】について

社会的事象に関する基礎的な知識は社会科にとって重要です。指導者はその単元において必ず身に付けなくてはならない項目や内容を様々な資料、メディアの中から取捨選択していく必要があります。多くの情報の中から正しい情報・必要な情報を事前に把握し、児童の発達段階に応じて提示していきましょう。

小学校【算数】

(1) 調査結果の特色

全体	<p>観点別の正答率は4観点ともに7割を超え、全て県の正答率を上回っており、おおむね良好な結果でした。また、小問別の正答率も全て県の正答率を上回っています。</p> <p>余りのある少数の割り算の正答率は昨年度よりも10%以上アップしましたが、四則混合の計算、計算のきまり(分配法則)の理解に見られた課題については、昨年度からあまり改善がみられませんでした。</p>	
観点別	関心 意欲 態度	<p>数量の対応や変わり方に着目して多様な見方をしたり、図形の構成要素に着目して、いろいろな四角形を作ろうとしたりする問題では、「おおむね満足」といえる回答ができた割合は87.0%、70.2%と良好で、無回答率も3%未満におさえられました。しかし、「十分満足」といえる回答ができた割合は24.7%、45.4%と昨年度より下がっています。より多様な見方をしようとする面において、関心・意欲・態度の育成を進める必要があります。</p>
	考え方 数学的な	<p>台形の面積を求める式をみて、その考え方を推察する問題の正答率は70.2%、78.2%(平均74.2%)と、昨年度とほぼ同程度の良好な結果でした。また、「関心・意欲・態度」の項目で扱った問題はこの観点にも含めています。</p>
別	表現 ・ 処理	<p>小数や分数の計算をしたり、図形の面積を求めたりする問題9問の平均正答率は74.1%で、昨年度同様おおむね良好な学習状況だといえます。余りのある小数の割り算で、余りの小数点の位置を間違えている子が昨年度と比べて、12.6%から7.8%に、余りの数を間違えている子が15.1%から5.0%へと大きく減りました。各学校において繰り返し学習に取り組んだ成果だと言えるでしょう。</p> <p>平行四辺形上に正三角形をしきつめて面積を等分することを考える問題では、正答率が62.9%と低めの結果となりました。また、無回答率も7.6%と高くなっています。同じ図形を組み合わせることによって別の図形が出来上がる、という関係の理解に課題が見られます。</p>

知識・理解	<p>昨年度に引き続き、四則に関して成り立つ性質を理解しているかを見る問題の正答率が50%台と低くなっており、大きな課題が見られます。四則混合計算では、掛け算よりも足し算を先に計算してしまう子が25.5%いました。今年度は分配法則に係る問題が2問ありました。乗数を足し算にして分配する問題は正答率が73.4%とおおむね良好と言える結果でしたが、被乗数を引き算に分配する問題では正答率が50.8%と全問題中最も低く、無回答率も8.0%と全問題中最も高いという結果でした。昨年度も同一の問題が出されていますが、その時の正答率56.3%、無回答率4.9%よりも低下傾向にあります。</p> <p>四角形の性質を理解しているかを見る問題の正答率は83.6%と高く、良好な学習状況だといえます。</p>
-------	--

(2) 指導上の改善点

基礎的・基本的な学習内容は、全体的におおむね良好な結果です。『少数指導』や『きめ細かな指導』等、指導法の工夫・改善が定着してきた成果と考えられます。今後は、学習指導要領改訂で具体的に示された「算数的活動」を各学校や教師が工夫して幅広く授業に取り入れて、子どもたちの「活用する力」を伸ばしていくことに重点をおいた工夫・改善を進める必要があります。

基本的な計算技能の確実な定着を図るため、スパイラル的な繰り返しの指導やドリル練習等の指導は今後も引き続き大切です。しかしそれだけに留まらず、子どもが目的意識をもって主体的に取り組む活動となるように指導する必要があります。例えば、小数・分数の計算などにおいては、およその値を量的にイメージしたり、線分図等を活用して類推的に考えたりする力を合わせて育てていくこと、四則に関して成り立つ性質においては、その法則を利用することで計算が簡単にできるという有用感を感じ取れるような指導の工夫をすることなどが挙げられます。

今後も数学的な見方・考え方を問う内容を授業の中で積極的に扱い、「子どもの考えを引き出し、共に考え、試行錯誤を通してさらに探求していく」学びあいの活動を重視することで、問三(3)、問四、問五、問六のような問題への抵抗感を薄めたいものです。

図形領域では、図形の楽しさ、美しさを味わわせるよう作業的・体験的な活動を多く取り入れ、実感的な理解を深めさせる必要があります。

全体的におおむね満足できる状況ではあるのですが、今後も、問題をしっかり読み取り、自分の考えを整理するとともに、自分の考えや友だちの考えの良さに気づき、学級全体で学んでいけるような授業展開がなされることが望まれます。

小学校【理科】

(1) 調査結果の特色

全体	<p>今年度の観点別平均正答率を県と比較すると、「観察・実験の技能・表現」が5.3ポイント低く、「自然事象への関心・意欲・態度」はほぼ同様の結果となっています。「科学的な思考」「自然事象についての知識理解」については、約3.5ポイント県より上回る結果となっています。昨年度、県の正答率より下回っていた「観察・実験の技能・表現」のうちメスシリンダーの使い方については今年度は県を上回る結果となりました。実験・観察を取り入れた授業の中で、一人ひとりが主体的に取り組んできた成果と思われます。</p>
観点	<p>関心 意欲 態度</p> <p>県の平均正答率とほぼ同様の結果でした。他の3観点と比較してみると高い値を示しています。昨年度の逗子市の結果よりも高い正答率でした。問四(3)「アメダス画像の順序性の設問」の正答率は95.7%と全小問中最も高い結果でした。昨年度は同様の設問で47.6%という正答率でしたので、学習の成果が表れていると言っていいでしょう。「電磁石の極の変化の設問」においては、67.4%とこの観点の中では一番低い正答率でした。</p>
別	<p>科学的な思考</p> <p>県の平均正答率を上回る結果でした。正答率の最大は問四(3)「アメダス画像の順序性の設問」で95.7%、最小は問三(3)「振り子が一往復する時間の変化の設問」で52.3%と大きな開きがありました。移行期の内容である問七(3)「電磁石の極の変化の設問」では県の平均正答率より9ポイント下回っていました。今後の授業改善が望まれます。</p> <p>記述式で答える問五(3)「大雨の時の川のにごりの設問」では、県より8ポイント高い結果となっています。</p>
	<p>観察 実験の 技能 表現</p> <p>県の平均正答率と比較すると若干下回っています。他の観点と比較しても正答率が56.8%と最も低い値となっています。特に問六(3)(ア)「顕微鏡の使い方の設問」では、県の平均よりは若干高いですが、3人に1人位の正答率になっています。顕微鏡を用いて学習する内容として「花粉の観察」に新たに「水中の小さな生物」の学習が加わり顕微鏡に触れる機会が増えます。児童一人ひとりが主体的に顕微鏡を用いて観察できるよう学習環境の整備や学習時間の確保が望まれます。</p>

知識理解	<p>全体の平均正答率では、県を3.6ポイント上回っています。ただし、この観点で一番低い正答率となっている問四(2)59.0%「晴れた日の1日の気温の変化を問う設問」では、県の正答率とほぼ同様(-0.8ポイント)です。「晴れの日には最高気温が高い。」ということを中心に考えてしまい、春・夏・秋・冬では同じ晴れの日であっても当然最高気温に違いがあります。晴れの日には、最低気温も低く、「1日の寒暖の差が大きい。」という理解を深めることが大切です。</p> <p>胎児の母体内の成長について、「胎児のへその緒は、母親のへその緒とつながっている。」という誤って理解している児童がかなりいます。</p>
------	---

(2)指導上の改善点

【関心・意欲・態度】について

天気の変化については、学校行事や校外活動が近づいてきた時など、新聞やテレビ等の気象情報にふれ、西日本の天候から次の日の逗子の天候を予想したりして、日常生活と結びつけて考えられるようにしていくことが大切です。

流れる水の働きと土地の変化については、モデル実験や映像資料を活用した上で、身近な逗子の川や海の様子を観察することによって実感を伴った理解が出来るような学習の工夫が大切です。

電流の働きは、電磁石の性質を調べる実験を通して関心・意欲を高め、身の回りで様々な電磁石が利用されていることに気付き、いろいろな機会を通して調べる学習も大切です。

【科学的な思考】について

植物の成長に「日光」や「肥料」が必要であることを調べる実験についての問題ですが、実験を計画する時に、調べる対象の有無についてのみ条件設定を行い、他の条件は同一で行うという理解を十分図り、実際に成長した植物の比較を通して思考していけるよう指導する必要があります。

振り子の規則性については、デジタル化が進んでいる現在、理論的または感覚的に理解を図ることが難しい事象です。振り子が1往復する時間はどんな条件とかわりがあるかについては、音楽室のメトロノームを使用し振り子の規則性を実感させるような学習も必要ではないでしょうか。

【観察実験の技能・表現】について

実験器具の扱いについては一人ひとりが実際に操作することによって習熟できるものです。顕微鏡についても例外ではありません。「水中の小さな生物」「花粉の観察」等、実験の機会を充実させ実験器具の取扱いに習熟させる必要があります。

【自然事象についての知識・理解】について

1日の天気の様子や気温の変化については、年間を通して計画的に気象観測の活動を行うことや、日常生活の中で天気や気温の変化について意識してとらえさせていく中で、児童が天気の変化の規則性を主体的に見出したりする学習が必要です。

母体内での成長にかかわらず、日ごろの学習において、「へその緒」や「胎盤」などの科学的な言葉を用いて、説明したり考えを述べたりする学習活動を取り入れ、言語活動の充実を図ることが大切です。

中学校【国語】

(1) 調査結果の特色

全 体	<p>「話す・聞く」「書く」「読む」「知識・理解・技能」の4観点の正答率が県の正答率を上回っていますが、「関心・意欲・態度」の観点の正答率は県の正答率をわずかに下回っています。「読む」では文学的文章及び説明的文章の読みそれぞれで、昨年度の正答率を上回りました。</p> <p>すべての観点で正答率が75%を超えていることから、子どもたちの国語の能力としてはおおむね良好であるといえます。</p> <p>特に書く能力で、県の正答率を10%以上、言語についての知識・理解・技能で5%以上上回っていることは評価できることです。</p>	
	関心 意欲 態度	<p>唯一県の正答率を下回りましたが、87.2%の子どもたちが相手に効果的に伝わるように表現しようとしていたことは評価できることです。</p>
観 点 別	話 す 聞 く	<p>話す・聞く能力の正答率90.1%は、全体としておおむね良好といえます。メモが的確にとれている結果と思われます。</p> <p>この観点については、昨年度に比較して10%以上上回っており評価できます。</p>
	書 く	<p>伝えたい事実や事柄を明確にし、条件に従って文章を書く力が育っています。正答率76.9%は県を10%以上上回っており評価できる結果ですが、昨年度よりは5%以上正答率が下回ったことは課題です。</p>
	読 む	<p>文学的文章の情景描写の持つ役割を理解する問題の正答率が10%と課題がありますが、読む能力の正答率76.3%は、全体としておおむね良好といえます。</p> <p>説明的文章では文章の内容をとらえ、前後の文脈の関係を理解することに昨年度同様、課題があります。</p>
	知 識 理 解 技 能	<p>言語についての知識・理解・技能の正答率は75.6%で、基礎的・基本的な漢字の読み書きや書写における楷書と行書の筆順の違い等の理解についてはおおむね良好な結果です。</p> <p>ただ、漢字の読みに比して書き取りの正答率が低いものがあり課題です。また、文法も主語と述語の関係の理解は43.3%、単語の性質についての理解が50%と県を10%以上上回ってはいるものの、半数以上の生徒が理解しておらず、これも課題です。</p>

(2) 指導上の改善点

「話すこと・聞くこと」

効果的な話し合いを展開するためには、話題や方向をとらえて的確に話したり、それぞれの発言を注意して聞いたりして自分の考えをまとめることが大切です。そのために学習活動の中に話し合いを取り入れるとともに、司会者としてのポイントを指導し、実際に全員が経験できるように計画

することも必要です。また、自己評価や相互評価による振り返りから次の課題を設定し、質の高い話し合いを生徒自身が目指すように工夫することも大切です。

「書くこと」

自分の意見を相手に効果的に伝える文章を書くためには、場面に応じた構成を工夫する必要があります。そのためには、日頃から自分が書いた文章を推敲し、目的にふさわしい構成や内容であるかを振り返る習慣をつけることや、お互いの文章を読み合う時間をもうけるなど、表現力や思考力を高め合うことが大切です。さらに語彙を豊かにするため、辞書を活用する習慣を図ったり、優れた文章を提示し、言葉を尊重する態度を育成することも大切です。

「読むこと」

文学的文章の読みでは、文章に即して登場人物などの描写に注意して読み、情景描写などに着目しながら内容の理解に役立てることができるよう指導していくことが必要です。また、自分の考えを短い言葉に記して小集団で発表しあうなど、読みを広げる機会を多くする工夫が求められます。

説明的文章の指導は、キーワードに着目しながら前後の文章の関係を考え構成をとらえることが大切です。そのためにも、「何が書かれているのか」とともに「どのように書かれているのか」に留意し、筆者の表現の工夫を自分の表現に役立てるような学習活動の展開が望まれます。そのためにも、たくさんのよい文章に触れる機会をつくる工夫が求められます。

その基盤となるのは、読書への意欲を持たせるとともに、目的に応じた本や資料を選ぶことのできる読書環境の整備にあると思われれます。

「言語事項」

「漢字を読むこと及び書くこと」の指導については、反復練習を充実させるとともに、漢字それぞれのもつ意味や熟語の構成を考えながら学習させるなどの指導が効果的です。また、学習した漢字を意図的に使用する場面を設定し、使って覚える繰り返しの指導の工夫も大切です。

さらに、漢字を書く指導では、書写との関連を図って、字体、点画、筆順等に注意し、楷書で正しく書くこと及び読みやすく早く書く行書を実生活で生かす場面の意図的な設定が必要です。

また、単語の性質や役割を指導する場合は、文法の知識のみの形式的な指導ではなく、多くの例文を提示したり、文章の中でも文の成分に触れながら確認するなどの工夫が大切です。

全体として

国語科で培う能力はすべての教科等の基盤です。他教科等との関連を意識し、国語科で培われた能力が他の教科で生かされることで、国語の力もさらに高まると考えます。

特に、PISA 型読解力の低下が課題とされている現状をふまえ、テキストとして提示された文章や資料を読み(聞き)、考え判断して、書く(話す)という学習活動を、国語科をはじめとしたすべての教科等で行う必要があります。そのためにも国語科では、学習指導要領に即した国語科でつける力を明確化かつ具体化して単元目標を設定し、生徒に単元の見通しを持たせながら PISA 型読解力を意識した授業の工夫・改善も必要です。

中学校【社会】

(1) 調査結果の特色

全 体	<p>昨年度と同様に観点ごとの正答率は「知識・理解」を除いて6割に届かず、4観点中3観点で県の正答率を5%以上下回るという大きな課題の残る結果です。</p> <p>3分野全ての授業において、単なる知識の習得ではなく、資料活用や考察の場面の工夫、学習に対する適切な評価に重点をおいた指導方法の改善が必要です。</p>	
	関 心 意 欲 態 度	<p>世界地図を活用し、時差や北半球と南半球の季節の違いを考察する問題、新旧の地形図を比較することによって地域の変化の様子を考察する問題、適切な資料を選択しテーマを考える問題、日本の産業革命時代と現代の労働の様子を表す資料を比較して考察する問題、いずれも正答率が低く、無回答率が高くなっています。日頃の授業に、複数の資料を活用して複数の考察を記述するような学習活動の機会を多く設定し、自分の言葉で表現していくことに生徒が意欲的に取り組めるように指導する必要があります。</p>
	思 考 判 断	<p>「思考・判断」に係る問題は4問で、「関心・意欲・態度」の問題と3問重複しています。与えられた材料から推察したり、考察したりということに課題が見られます。</p>
	技 能 表 現	<p>地形図、世界地図、統計資料、歴史資料の適切な活用方法がまだ十分身につけていないことがわかります。統計資料が示している数字そのものを見ればわかることを問う問題(問二ロシア)の正答率は88.9%と全問題中最も高いものでしたが、複数の資料を比較したり、資料が示す数字を用いて新たな数字を導き出したりして考察する問題になると、正答率が大きく下がります。資料の活用方法を基本から丁寧に指導する必要があります。</p>
知 識 理 解	<p>社会事象についての知識・理解をみる小問10問中三海洋の名称を問う問題、ペリー来航地名と場所を問う問題の3問は正答率が80%を超えました。他の問題でも50%を超えており、4観点中この観点は、県の平均点を5%以上、上回っています。</p> <p>問五の正答・誤等の傾向から、時代ごとの主なできごとの理解に課題があることがわかります。各時代の特色、大きな流れを確認する学習を、スパイラル的に繰り返し取り入れることが必要です。</p>	

(2) 指導上の改善点

【関心・意欲・態度】

社会的事象に対する関心を高め、それを意欲的に追求し、よりよい社会を考え自覚をもって責任を果たそうとする態度の育成のためにまず工夫すべきことは、学習内容に対する生徒の興味・関心を高めることです。コンピューターや情報通信ネットワークを活用して様々な情報を多様な方法で生徒に提示することもその一つです。さらに作業的、体験的な学習の充実を図り、生徒自身

に課題意識をもたせ、学習をすすめる中で、学びが深まる展開を工夫していくことが大切です。

【社会的な思考・判断】

授業展開の中で、社会的事象の相互の関連を考察することや、事象の背景や要員を探るような活動を通じ、自分の言葉でまとめる力を培うことが大切です。考えを交換する場面を設定し、生徒が学びあいの中から自らの考えが深まっていくことを実感できるよう指導や助言を工夫する必要があります。

【資料活用の技能・表現】

複数の形態の異なる資料から読み取れることを、自分の言葉で表現することや、読み取ったことをさらに分かりやすく伝えるための資料を作成するなどの作業を意図的に授業の中に取り入れていく必要があります。

また、指導の際には、生徒が恣意的な考察や判断に陥らぬよう、多面的・多角的な思考とともに、諸資料にもとづいて考察させるよう意識を払うことも大切です。

【社会的事象についての知識・理解】

社会科で身につけなくてはならない知識量は大変たくさんありますが、知識に偏りすぎた指導にならないようにするために、基本的な事項・事柄を厳選して指導内容を構成することが大切です。その際、小学校社会科の内容や、生徒たちのそれまでの生活経験と関連付けて学習を進めることも方法の一つでしょう。

また、社会的事象を断片的にとらえるのではなく、大きな地域の特色の中で、或いは大きな歴史の流れの中で、様々な事象との関連性でとらえ、知識が定着し、生きてはたらくものとなるよう授業展開を工夫することが必要です。

中学校【数学】

(1) 調査結果の特色

全体	<p>「数学への関心・意欲・態度」「数学的な見方や考え方」「数学的な表現・処理」「数量・図形などについての知識・理解」の4観点の正答率がすべて県の正答率を上回り、特に「数学への関心・意欲・態度」「数学的な考え方」では10%以上高い結果となり良好でした。</p> <p>領域別の正答率を見ると、「図形」「数量関係」では県の正答率を上回り概ね良好ですが、「数と式」については若干下回る結果となりました。図形の証明問題(完全証明)における正答率が16.0%と低い割合であることから、論理的思考力、表現力、そして試行錯誤しながらも自力解決しようとする態度を育てることが今後の課題と考えます。</p>	
観点別	関心意欲態度	<p>「数学への関心・意欲・態度」の観点では、県の正答率を12%上回り良好な結果となりました。また、「図形」では垂直二等分線の性質を理解し、2つの垂直二等分線の交点が円の中心になることを利用し、それを作図で求める問題で、県の正答率を大きく上回ったことは評価できることです。</p> <p>他の領域でも良好な結果でしたが、今後も身近な日常の事象と関連づけた多様な考えが可能な問題を扱い、数学的な興味・関心を高める指導の充実が重要です。</p>
	数学的な見方考え方	<p>「数学的な見方・考え方」の観点では、問題解決に向けて問題のもつ本質を理解し、判断し、深く考える力が問われます。</p> <p>全体的には県の正答率を、10%を超えて上回り良好と判断できますが、図形領域における、線分の長さが等しいことを、与えられた条件や平行四辺形の性質を利用して考察し、図形の証明問題(完全証明)の正答率が16.0%とかなり低い結果となりました。</p>
	表現処理	<p>「表現・処理」については、全体で54.3%と、概ね良好といえます。</p> <p>特に、正負の数の四則計算の問題や、連立方程式を解く問題で、それぞれ74.1%、72.7%という正答率は評価できることです。</p> <p>今後も「習得」から「活用」のステップを丁寧に繰り返し指導することが大切です。</p>
	知識理解	<p>基礎的・基本的な内容についての正答率の高い結果でした。</p> <p>「数と式」領域での同類項のまとめ方や式の値の求め方、「図形」領域での各図形の性質、「数量関係」領域では1次関数の性質を概ね習得していると判断できます。</p>

(2) 指導上の改善点

基礎的・基本的な学習内容は、全ての領域においておおむね良好な結果です。「少人数指導」や「きめ細かな指導」等、指導法の工夫・改善が図られた成果と考えられます。

図形における「完全証明」は高いレベルの問題ですが、直観力や論理的思考力を高めることや、試行錯誤をしながらじっくり考えるといった活動は、数学教育で大切にしたいことの一つです。証明問題の中で、結論に結び付けるためにどんな根拠を揃え、繋げていけば良いのか、スモールステップを踏んでの論理的な思考力を高めていく工夫が大切と考えます。

生活の変様とともに直接体験が不足している状況の中、定規やコンパスを上手く使えない生徒がいる現状があります。

「数学的活動」を行う中で試行錯誤をしながら自力解決できる力を育成することも数学教育で大切と考えます。じっくり考えるという主体的な活動を充実させるような指導の工夫・改善が求められます。

数学的な見方・考え方を身につけさせるためには、機械的なパターン化された問いだけでなく、発問を工夫し、生徒がその問題を多角的に見ることができるようになることが大切です。多数の視点が予想されるような教材を用意することも重要で、それによっていろいろな考えを引き出し、自力解決する意欲を持たせ、思考力や応用力につなげていく、そんな授業展開が望まれます。

中学校【理科】

(1) 調査結果の特色

<p>全 体</p>	<p>今年度の観点別の正答率は、すべての観点で県の値をやや上まわっていることから、逗子市の中学校の理科の授業では一定の基礎基本の定着が図られており、逗子市の理科教育は良好である、といえます。しかし、「科学的な思考」については県の平均を上まわっているものの正答率が50%以下であることから、この観点を伸ばしていくことは県全体の共通の課題でもあります。逗子市でも指導の改善を図るにあたっては重要な課題とする必要があるでしょう。</p> <p>逗子市の中学生の課題としては、次の2点をあげることができます。</p> <p>1点目は、2分野の正答率が62.1%に対して、1分野の正答率が41.9%で、その差が20%以上あったことです。県のその差が10数%であった事に比べて大きな違いといえることができます。逗子の中学生は2分野を得意とするが、1分野の内容に関心が薄かったり苦手意識があったりして「科学的な思考」をできにくくしているということがあのではないのでしょうか。その意味で1分野の学習内容については、まずは楽しく興味が持てるような工夫をしていく必要がありそうです。</p> <p>2点目は、実験データをグラフに表したり、表やグラフから数値を読み取ったり、読み取ったことをもとに現象を説明するといったことを苦手としていることです。問題の形式を細かく比較してみると、分野に関係なく表やグラフを扱った問題では正答率が30数%で、知識を問う単純な問題の正答率が60%以上ある事に比べ明らかに低くなっています。いわゆるPISSA型読解力に相当する力をつけていくことが課題であるといえます。</p> <p>昨年度の調査結果にもあったようにどの分野にも偏り無く「いかに理科好きな子どもたちを育てていくか」と同時に、どの教科にも通じる「読解力」をつけていくことが益々これからの重要な目標となると考えられます。</p>
<p>観 点 別</p>	<p>問三(2)は無セキツイ動物の名前を書く問題ですが、正答率は80%を上回っており、身近な無セキツイ動物に興味・関心をもち、背骨がない動物について理解していると捉えることができます。</p> <p>問七(3)は身の回りの電気機器に関心をもち、電流に関する原理が使われていることを理解しているかを問う問題ですが、正答率は57.8%とほぼ満足できるレベルに達しています。</p> <p>問九(2)ではいろいろな化学変化に興味・関心をもって実験を行い、化学変化のしくみについて理解しているかを問う問題ですが、正答率は35.4%でした。水の電気分解で電極に集まった気体の少ない方が何かという興味を持つだけでなく、他の化学変化で発生する気体が何であったかという知識も必要な問題では、個別の知識としては多くの生徒が理解できているはずですが、このように問われたとき、忘れていたり結びつけて考えられなかったりする生徒が多いことが分かります。</p>

<p>科学的な思考</p>	<p>問一(1)及び(3)のねらいは、実験の条件や結果を消化酵素の働きと関連づけて考えることですが、共に70%以上の生徒が正解しており、消化酵素の働きについて理解できているようです。</p> <p>問六(2)は抵抗にかかる電圧と流れる電流の関係を見いだす問題ですが、正答率は40%を下回っています。解答が記述式であることも影響していると思われませんが、それだけではなく表のデータから情報を読み取る力や、既習事項や他の教科と関連した問題を解く力に課題があることが見て取れます。</p> <p>問六(4)では並列回路の各部に流れる電流の関係を見いだすものですが、直列回路の結果の表から二つの抵抗の値の大小が分からないとできない問題で、正答率が20%を下回る結果となりました。直列・並列の各回路の電流の流れは理解できていても、別の実験の結果を用いてさらに計算するといった2段階の思考が必要なことがその原因だと考えられます。</p> <p>問七(1)は電流の回りにできる磁界を地磁気と関連づけて考える問題でしたが、正答率は51.7%でした。しかし(2)のコイルに発生する電流の向きをコイルや磁石の動かし方と関連づけて考えさせる問題では正答率が38.8%と低い結果になりました。これは正答が一つではなく三つともできて正答とすることが主な原因と考えられますが、授業のなかでもきちんと理解できるよう指導が必要なところです。</p> <p>問八(3)では、うすい塩酸とうすい塩酸に反応する炭酸水素ナトリウムの質量の関係を考える問題ですが、21.8%と低い正答率でした。これは表の数値を操作したり、数値の持つ意味を理解する思考力が必要なためと考えられます。</p>
<p>観察実験の技能表現</p>	<p>問六(1)は直列回路での電流電圧を測定する回路を作る問題で、正答率は50.1%ありました。しかし、電流計・電圧計を正しく接続することについてはもっと多くの生徒に正しく理解させておきたいところです。</p> <p>問八(2)は表の実験データからグラフを作成できるかを問う問題ですが、正答率は34.5%でした。これは表の数値の読み取りができないのか、表の数値の操作ができないのか、あるいはグラフ化の技能そのものがないのかの原因を明確にし、今後の指導に活かす必要があるようです。</p> <p>問九(1)ですが、81.1%と高い正答率となっています。水の電気分解の方法について良く理解していると言えますが、問題の出し方が他の知識と併せて考える必要がない形だったことも理由の一つと考えられます。</p>

知識・理解	<p>問二(2)じん臓の名前と働きを問う問題ですが、他の知識を必要としない単純な知識を問う問題としては正答率が48.7%とやや低いようです。</p> <p>問三(1)も知識を問う問題ですが、正答率は42.9%とさらに低くなっています。これは3つともできて正解になることや、表のデータから情報を的確に読み取ることが苦手なことを端的に表している例ではないでしょうか。</p> <p>問六(3)はオームの法則から電気抵抗を求める問題ですが、正答率は県よりやや上の35.8%です。この問題も、表からデータを読み取りオームの法則の式に当てはめて計算するという部分が難しいようです。また、計算式はできても電流値mAをAに変換してから計算しないといけない等、算数・数学や計算の苦手な生徒には難しかったようです。</p> <p>問八(1)は化学変化の前後で質量保存の法則が成り立つことを理解しているかを問う問題で、正答率が70.7%ありました。単純な記憶再生の問題ですが、表の数値から情報を読み取る問題形式には高い正答率といえます。</p> <p>問九(3)は物質のつくりについての問題ですが、正答率は32.5%と低くなっています。これは水や酸素・水素が分子・単体・化合物のどれに当たるのか、きちんと理解していないことと、2つともできて正解となるためと言えるでしょう。</p> <p>問九(4)は化学変化を化学反応式で表す問題で、25.7%と低い正答率でした。他の単純な知識を答える問題については比較的高い正答率であったことから、水の電気分解の化学反応式は、3つの化学式を記憶しかつ化学式の係数の表し方を理解していること等単純な記憶再生ではないからかも知れません。しかし、水の電気分解は、環境教育との関連でこれからのエネルギーとしての水素の役割など、重要な知識・理解としての位置づけから、繰り返し練習するなどの指導も必要なのではないかと思われまます。</p>
-------	---

(2)指導上の改善点

観察・実験授業でのもう一工夫

観察・実験については、これまで以上に取り入れていくことはもちろんのことですが、生徒自身が実験方法を考え、結果を予想するための機会を確保することが必要と思われまます。そのためには、例えば、できるだけ少ない人数で実験を行えるよう実験器具を整え、少人数の班編成の工夫をすることが考えられます。できれば、生徒一人ひとりが実験操作を経験できるよう、実験班の中で役割を交代させながら行わせることも考えられます。どの生徒にも自ら実験する機会を与えたいものです。

実験後のレポートでは、観察・実験のねらいと結果を対比させた考察をして結論を導く指導を行うことが大切です。このとき、実験データをグラフに表したり、表やグラフから数値を読み取らせたり、それをもとに現象を説明する等、資料の処理についての技能の指導も必要です。そして、これらのことを授業にしっかりと位置づけていくことが重要です。

実験に関する技能については、パフォーマンステストなどによって着実に身につけさせたりするな

どの工夫が考えられます。チェックリストを作っておいて、生徒同士の相互評価により技能の習得を行うような指導の工夫も考えられます。

モデルを通して自然現象を理解する工夫

モデル等を利用した指導の工夫が必要な例として、今回正答率の低かった直列回路と並列回路の場合があげられます。それぞれの回路の特徴を理解するためには、回路中の電流と電圧の関係などを実験の結果を基に考察し特徴を整理するというだけでなく、モデルや図と実際の事象とを対比させながら理解を深めさせる指導方法が考えられます。

例えば、電池 1 個と抵抗 1 個の基本回路を流れる電流と水の流れとを比較し、さらに直列回路や並列回路についても水の流れと比較するなど、モデルや図を使って、電流や電圧について具体的なイメージ化を図るといったことです。

科学的思考を深める手立て

昨年と同様「科学的な思考」の正答率が県・市ともに 50% を下回ることから、実験や観察を積極的にいき、生徒一人ひとりが実際に関わる場面を増やすことが大切です。計画段階から考察、発表までのプロセスで友達の意見を聞く機会を設け試行錯誤させながら、科学的思考をいかに深める手立てを授業にとりいれるかが、今後の課題です。

全体を通しての課題

県との比較では概ね良好でしたが、分野による正答率の差が大きいという結果から、一分野の指導により一層の工夫を行う必要があるようです。特に「電流と磁界」に関しては数年前からの課題で、電流計・電圧計と抵抗の関係や電圧計の使い方などの内容の理解がもう一息です。考えさせる工夫も大切ですが、反復練習により九九を覚えるように化学式や化学反応式を暗記したり、電流計・電圧計の使い方を覚えたりすることも必要です。大切なのは、そのバランスをどうとるかが課題と言えるでしょう。

また、逗子ではほとんどの小・中学校で実験を積極的に取り入れた授業を行っていますが、児童生徒に実験を企画・計画させる授業の工夫をすることも今後の課題となりそうです。

中学校【外国語】

(1) 調査結果の特色

全 体	<p>「聞くこと」については、全設問で県の正答率を上回り、全体的に良好と言えます。授業の中におけるIEAの積極的な活用や、コミュニケーション活動を多く取り入れた授業の工夫など、音声を重視した指導の成果が表れています。</p> <p>「読むこと」についても、概ね良好ですが、「短い文章を読んで、その内容を読み取る」については、「読むこと」の他の設問に比べて低いものもあり、県の正答率を若干下回っています。基本的な語句や文の仕組みを身につけさせるとともに、いろいろな種類の英文に多くふれさせる指導も必要です。</p> <p>「書くこと」については、正答率が54.8%で、他の分野に比べ依然として低いことが結果から読み取ることができ、昨年度までと同様の課題が残っています。単語のつづりや構文の正確さ等が要求されるため、「書くこと」はハードルの高い課題であることは理解できますが、改善に向けた指導の工夫をより一層進める必要があります。</p>	
	観 点	<p>関心・意欲・態度の観点は、「書くこと」の1設問で測っていましたが、78.6%と8割に近い生徒が意味の伝わる英文(質問文)を書くことができていることから、概ね良好な結果と言えます。</p> <p>「書くこと」のみで表現の能力を調査しています。この観点全体での正答率は県を上回っていますが、他の観点に比べると低い結果であることは否めず、ほとんどの設問で県の正答率を下回っています。問三の(2)は正しく英単語を書かせる設問ですが、5割に満たない正答率の設問がほとんどで、単語を正確に綴る力がついていないとは言えません。単語や語句の綴り方の正確性を意識させ、正確に英文を書くことを意識させる指導が必要です。</p>
別	理 解 の 能 力	<p>「聞くこと」「読むこと」の2観点で理解の能力を調査しています。ほとんどの設問で県の正答率を上まわり概ね良好と言えます。細かなところにとらわれることなく内容を聞き取る力や、キーワードとなる語句や表現に気をつけながら読み取るとる力を育てたいものです。</p>
	知 識 理 解	<p>問三の(1)のイのように疑問詞 What の後ろに名詞が続く形の語順の並べ替えは、昨年に引きつづき低い正答率となっています。定着しにくいものについては、文法事項として繰り返し指導したり、口頭練習で繰り返し使わせたりする必要があります。</p>

(2) 指導上の改善点

「聞くこと」については、小学校からのIEAとの関わりが成果となって表れています。IEAの英語や教科担任のクラスルームイングリッシュを聞かせる機会を多くする努力は継続して行ってください。キーワードを聞き取り内容を理解する力を育てることにつながります。さまざま

な教材や指導法を用い、「注意深く聞き取ること」や「一度で要点を押さえる聞き方」を訓練していくことも必要です。単語や文のしくみを身につける学習においても、発音練習や音読練習を繰り返し行うなど、「音声」による活動への取り組みが大切です。

「読むこと」については、各学校での取り組みの成果が表れていますが、文章が長くなると、理解に時間がかかる傾向は否めません。日本語で理解しながら読みすすめていくことが原因と思われるので、日本語を介さないで読み取る力をつけさせる工夫をしてください。様々なジャンルの英文にふれさせる機会を多くつくることと、短めでまとまった英文を数多く読ませることが必要です。長くまとまった英文を読むことへの抵抗感をなくす取り組みを考える必要があります。

「書くこと」については、単語や基本文を正確に覚えさせることに重点をおいた指導が引き続き必要です。書ける力を徐々につけさせるように、スモールステップを踏んでいく授業展開を工夫してください。自分らしい表現を生み出させ、発信する活動も必要ですが、はじめから大きな課題を与えるのではなく、既習の単語や語句、表現等を用い、5文程度のまとまった内容の英文を書けるようになるところからはじめて、少しずつ長くまとまった文を書けるように教材等工夫してください。

生徒たちが英語を使っている実感をもてるような活動を取り入れた授業の組み立ても大切です。活動へ参加することによって、生徒たちに自信をもたせることが学習への更なる意欲につながります。

ねらいを明確にし、目標に基づいた指導を行ってください。「覚えたことを実際に使う」「実際に使うことで覚える」の両要素を意識して授業を組み立てることも重要です。指導したことを評価し、その結果を指導に活かすことを通して、指導と評価の一体化を進めてください。